内田英治さん追悼の辞

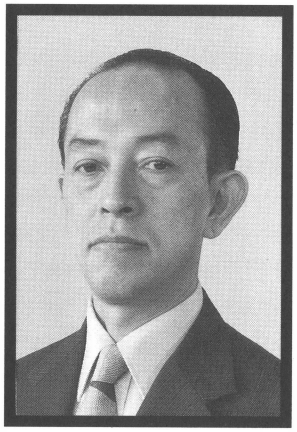
内田英治さんは平成5年10月10日に伊豆高原で開かれていた無教会キリスト教全国集会に待晨(たいしん)集会の代表として出席中，自分の発表の寸前に倒れられ，ただちに病院へはこばれましたが11日午前0時10分脳幹部出血のため亡くなりました．67歳でした．

私が内田さんと最初にお会いしたのは昭和28年の夏で，気象研究所で毎週一回開かれる雲物理研究会に参加してからです．内田さんは研究所の中野分室に勤務され，この研究会では毎回のように川霧と山霧の凝結核を論じておられました．「研究目的の位置付けが大切である．雲核の研究は降水機構研究の一部か，はたまたエーロゾル研究の一部か」と悠々と始まるので，短気な私などが「つまり川霧の核は燃焼核でしたか，海塩核でしたか」とたたみかけますと，「究極の結論をあせったり，人目につく結論を出そうとしてはよくない」とまじめな顔でお答えになるので，どっと笑って緊張がほぐれ肩の力がぬけるのでした．

それでいて飛行機観測用の雲粒測定装置を2種類，塩化水素型クラウドチャンバー，カスケード式エエロゾル捕捉装置などを着々と開発実用化され，科技庁の予算で昭和37年11月8日に調布の飛行場から1番機が飛んで以降5年間に500時間の飛行機観測が実施された全期間，内田さんの装置は威力を発揮しました．これによって北陸，関東，八丈島をカバーする陸上，海上の冬季と夏季の積雲と層積雲の雲粒々度分布と雲核の種類が解明されました．私は何回も一緒に飛びましたが，沢山の装置を操作する合い間に，雲のスケッチを丹念にとっている内田さんの落着いた姿がありました．

昭和43年8月26日からカナダのトロントで国際雲物理学会があり，内田さんと私も出席しました．内田さんは大田正次さんと連名でモンテカルロ法による降水粒子の形成を発表され好評をえました．これは雲粒から雨滴，雪片の成長までを包括的一般的に扱う手法の提唱であり，内田さんの気質の大胆な一面を表わしています．

内田さんの大胆な性質は昭和46年に下関地方気象台長として行政職に出られて以降ますます発揮されました．地方研究の現代性を唱えられ，大気汚染，豪雨雪，乱気流，視程障害が交通や住居をおびやかしている現代にあって，地方気象官署は地方の社会的要請に対して直接に即応的に答えるべき学問的使命を持っているとして，山口県下松市の沖合に気象測器を乗せた数隻のモーターボートを浮かべ，海岸にはパイバール，ご自分は湾を見おろす丘の上からトランシーバーで地台職員と気象協会職員を陣頭指揮されました．激励講演をたのまれて下関地台をたずねたとき，私は小声で「内田さん少しやり過ぎでは」と申し上げますと，「本庁や研究所が動くまで待てと言うのですか．只今現在が必要なんですよ．学問は間接的に社会の役に立ちさえすればいいと言ったもんじゃないでしょう」と一喝されました．今にして思えば無教会派キリスト者の戦闘的な一面であったかと思います．昭和48年にも札幌管区気象台技術部長として石狩平野と勇払平野に日本海と太平洋から進入する海風の環境調査をなさいました．



その後，気象庁の予報課長，研究所予報研究部長のとき天気の編集委員長として，地方論文の積極的収集，やさしい解説，管区気象台の発表会にアドバイスして天気へ掲載するなど，また気象学会百年（昭和57年）に向けて和文，欧文の記念論文集を企画，準備，刊行するなど昭和51年11月から56年3月まで活躍されました．その間にも昭和53年2月28日夜，地下鉄東西線が荒川の橋の上で突風に遭遇し最後尾2両が転覆したと

き，予報課長であった内田さんは陣頭指揮されて調査をなさり，たつ巻であったと定量的な証拠を積み重ねて証明されました．

昭和60年4月に気象庁長官になられた内田さんは伊豆大島の噴火の対応にご苦労なさいましたが，その間にも歴代長官がどうしても踏み切れなかった民間に天気予報を開放する方角にGOを出されました．内田さんの大胆な面を発揮されたもので，今日の気象業務法改正の実質的な出発点になったものと拝察しています．

退官後に日本気象協会顧問になられた内田さんは故高橋浩一郎先生の跡をついで産業気象利用者協議会の会長として，また損害保険協会で活躍されました．平成5年9月24日に気象協会麹町事務所に出勤された内田さんは，「旅行会の団長として旧東ドイツへ行って鎮魂のミサ曲を聴いてとてもよかった．私が死んだらやり残した仕事が2つあるので，近く開かれる2つの座談会の席上で誰と誰にやってもらいたいと述べたい」とおっしゃいますので，「内田さんは90歳か100歳まで長生きなさいますよ」と申し上げたのですが，座談会の前に亡くなりました．待晨集会の密葬の司式者の述べた「なんじ内田英治よ，よくやった．もうよい．ただちに天へ来い，と神が内田兄の脳幹部を一撃なさいまして，どなたとも口をきくことなく天に召されました」は本当であったかと感じました．良き先輩であった内田さんのご冥福をお祈りします．

（日本気象協会　駒林　誠）

情報 File

熱帯低気圧の進路予報に関する国際会議

標記国際会議を1994年1月17日（月）～21日（金）に気象庁において開催します．この会議は，熱帯低気圧の数値予報に関する諸問題を幅広く議論し，その改善を目指すもので，海外の気象機関や研究機関から10名の研究者を招待する予定です．また，台風予報に関心を持つ国内の研究者の参加を募ります．自由に参加し台風予報の将来を大いに議論していただきたいと思います．

1．期日，会場：1994年1月17日（月）～21日（金）
気象庁第一会議室

2．内容

(1) 各予報センターの数値予報モデルの現状（熱帯低気圧を中心として）

(2) 数値予報のための熱帯低気圧実況把握（観測，データ同化，客観解析ほか）

(3) 熱帯低気圧の短期予報（熱帯低気圧のための狭領域数値予報モデリングほか）

(4) 熱帯低気圧の週間予報（熱帯低気圧のための全球数値予報モデリングほか）

(5) 熱帯低気圧の基礎研究（構造，発生発達や移動のメカニズム，気候特性ほか）

3．使用言語：英語

4．参加無料

プログラムの詳細は現在調整中です．詳しくは下記までお問い合わせください．特に口頭発表をご希望の方はできるだけ早くご連絡下さい．

＊この会議は（財）シップアンドオーシャン財団（笹川良一会長）の平成5年度海外交流事業の一環として実施されます．

〒100 東京都千代田区大手町1-3-4
気象庁数値予報課内
熱帯低気圧会議担当　岩崎俊樹，上野　充
TEL 03-3212-8341 内線3315
FAX 03-3211-8407